

宮古・池間島カツオ産業文化誌（2） —ぎょしょく「魚職」からみた生活世界—

若林良和（愛媛大学副学長・南予水産研究センター教授）
川上哲也（池間文化協会会長・愛媛大学大学院特定研究員）

1. はじめに

筆者らは、池間島のカツオ産業文化に関して、歴史学・民俗学・社会学・地理学など学際的な視点から総合的に究明している。前号では、池間島のカツオ産業（カツオ漁業と鰹節製造業）を地域漁業史の視点から整理した。具体的には、宮古地域に関する史資料をもとにカツオ産業の年譜を作成した上で、池間島という地域の近現代産業史の特性を把握した。

本稿はその続編として第2弾にあたる。カツオ産業文化の史的展開について、先行研究の記述をもとに、当時の池間島におけるカツオ漁業の実相を再構成することが本稿の目的である。ここでは、まず、7つの「ぎょしょく」の意味を略述した上で、第3の「ぎょしょく」の「魚職」（カツオに関わる職業、すなわち、ここではカツオ産業であるカツオ漁業と鰹節製造業）を検討する。

本稿では、池間島のカツオに関わる生活世界について、トピック的な事例を整理する。その手立てとして、既存文献とインタビュー記録をもとに、①カツオ漁業発展の礎となった鮫島幸兵衛の創業、②大正期から昭和期におけるカツオ産業の展開過程、③池間島のカツオ漁船にみられる漁民信仰の実態、④カツオを基軸にした島生活の状況といった4つの点から描出しておきたい。¹⁾

2. 7つの「ぎょしょく」の意味

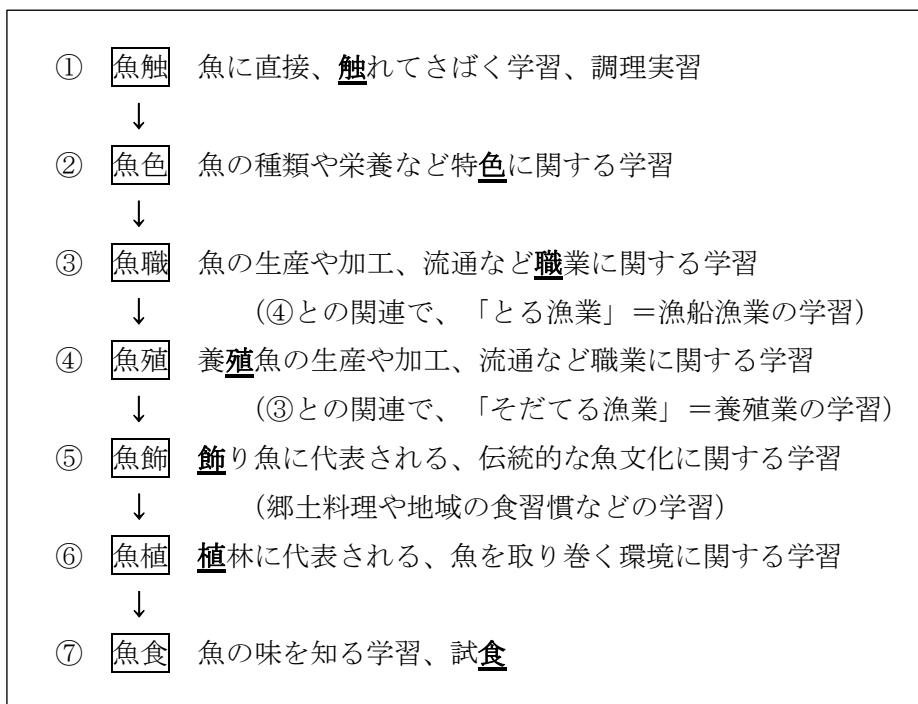
筆者の若林が2005（平成17）年に提案した総合的な水産版食育「ぎょしょく教育」は、食育基本法にもとづく食育推進と消費拡大のための魚食普及を統合した取り組みと位置つけられる。²⁾

「ぎょしょく教育」推進の視点は、①地域特性を念頭に置き、地域に存在する漁業や水産加工業、地域の生活文化を生かすこと、②従来魚食普及や栄養指導などを踏まえつつ、漁と食の再接近のために新たなコンセプトとして「ぎょしょく教育」を提示し検討すること、③社会学や経済学などの社会科学的な立場から、水産業に関わる生産から消費までをトータルに把握し、フードシステムのなかで魚を把握することである。

「ぎょしょく」をひらがな表記することで、単に「魚食」だけでなく、7つの「ぎょしょ

く」として魚の生産から加工、流通、販売、消費、文化まで多くの意味を含み、魚にまつわる諸事象をより精緻で体系的で、かつ、動的に把握できる。7つの「ぎょしょく」は具体的に次のとおりである。(図1参照)まず、魚の調理実習や、魚に直接接触する体験学習の「魚触」、次に、魚の種類や栄養などの魚本来の情報に関する学習である「魚色」、それから、魚の生産や流通の現場のうち、漁船漁業を知る学習の「魚職」と、海面養殖業に関する学習である「魚殖」、さらに、漁業者による植林活動など環境学習の「魚植」、伝統的な魚文化の学習である「魚飾」、最後に、地域で水揚げされた魚の料理を試食する「魚食」である。つまり、「ぎょしょく教育」は「魚触」から「魚飾」まで一連の6つのプロセスを経て、第7の「魚食」に到達する仕組みになっている。³⁾

図1 「ぎょしょく教育」のコンセプト：7つの「ぎょしょく」



「ぎょしょく教育」の実践により、地域の教育分野と産業分野に大きな効果が得られる。

まず、教育分野では、地域の教育力を止揚し多面的な推進が可能になる。「ぎょしょく教育」は、地域活性化の基盤、地域の教育力を止揚する取り組みと位置付けられ、地域の社会関係そのものを豊かにして、「地域理解教育」として水産業と地域社会を紡ぐことができる。

「ぎょしょく教育」は、論理と感性を伴う教育方法で地域の社会や文化を総合的、かつ、系統的に理解することから、「地域理解教育」と位置付けられる。「地域理解教育」としての

「ぎょしょく教育」は、子供たちの魚離れ是正にとどまらず、子供とその保護者に対して、地域の良さを改めて問いかけ、地域への愛着や誇り、地域に対するアイデンティティを醸成するきっかけ、水産業と地域社会を紡ぎ直す有効な契機となる。

それから、産業分野では、水産振興に向けた多角的な展開が期待される。これは、地域活性化の基盤、地域の水産振興を推進する取り組みと位置付けられ、水産振興のツールとして、地域の産業経済を止揚させることができる。他地域との差異化を図った優位な商品ブランドを開発するとともに、地域そのものをブランド化すること、つまり、地域の魅力づくりを展開するものである。

3. カツオ漁業発展の礎となった鮫島幸兵衛

明治期に入って池間島の産業経済や生活文化などに急激な変化をもたらしたものの一つは、カツオ漁業であった。池間島では、カツオ漁業が1906（明治39）年7月に起業された。鹿児島県出身で商人の鮫島幸兵衛は、和船2隻を宮崎県から借り受けてカツオ産業の経営を始めた。池間島を拠点に、狩俣沖など池間島周辺海域を漁場にしてカツオ一本釣り漁業が着手された。当初、漁撈を鹿児島県と宮崎県の漁業者が担い、池間島民は一本釣り用の活餌採捕に従事した。鮫島は、池間島の若者を実習生として迎えて技術の習得につとめさせるとともに、鰹節製造も兼ねていた。これが「カツオの池間島」を築く基盤となったのである。

当時のカツオ漁船は船長8尋で八丁櫓を備え、一本マストの帆船だった。当時の乗組員は船頭、操舵役、左右舷の漕ぎ手など16人と活餌採捕2人、船底の垢くみ（船底に入り込む海水を汲みだす）係を含めて合計21人が乗り組んでいた。（伊良波（2013）：140頁）カツオ漁船内には活間（いけま）がなかったことから、活餌は桶に蓄えて生かし、柄杓で水をくみかえるという非効率なものであった。漁場は陸上からカツオ群が眺見できるくらいで、非常に近距離の操業もあった。無風時には、勇ましい掛け声で櫓を押して帰えらざるを得ず、大変な重労働となった。池間島の若者は海技に長じて習熟も早く、漁撈技術の上達が顕著であった。それ以前の刳り船による漁業からみれば、こうしたカツオ漁業は地域にとって革命的な意味合いを持ち、当時、1人当たりの1漁期における配当は約40円に及んだという。⁴⁾（森田（1961）：68頁）

当時のカツオ漁業に関して、吉浜カナス [1898（明治31）年生まれ] は次のように述懐している。「池間島のかつおぎょうは、私たちのちいさいころかごしまの人たちが、とほい（遠い）ところから、ほうせん（帆船）をもってきて、お父さんたちをのせて、おしへ（教え）て下さいました。どうもありがとうございます。池間のお父さんやお兄さんだけでもできるようになりました。ほうせん、かぜのあるときは、はやくにかえってくるが、かぜのないばやい

(場合)は、かいでこぎ、とほいところからもきこえて、「やあしんよい」「やあしんよい」と、こへをかけて12じごろまでもかえってこないばあいがたくさんあった。(略)私の兄はせいぞう人であり、女のはやわらかいので、かつおぶしけずりは、じょうずにけするだろうとおしへて下さったので、ともだち3人と私の4めい。なつの5、6カ月は、けずりはじめて、はじめのほどは、けづりこ(削り粉)もうけで、それをかう人もないので、すてものにしてはいたが、平良から、なかがい人がきて、1斤で10銭でかってくれた。」(加藤久子(1987):47頁)

1908(明治41)年には、カツオ漁船数は増加し、宮崎県人も入漁した。当時のカツオ漁業経営者はすべて県外出身者であった。他方、カツオ漁業経営者に伴われて、愛媛県から鰹節削り女工さん達も交代で来島していた。身ぎれいな彼女たちは、池間島のカツオ産業功労者ともいえ、また、池間島の青年達の憧れの的だったようだ。⁵⁾ 各工場では、沖縄県の奨励もあって鰹節製造技術の向上と改善が図られ、池間島の鰹節は良い評判で価格も高かった。こうして、カツオ産業が軌道に乗ってくると、池間島内では組合結成の機運が高まり、法人組合として池前漁業組合は1909(明治42)年8月に誕生した。なお、それ以前の1904(明治37)年に任意組合として池間漁業組合が創立されていた。

1923(大正12)年、漁業組合設立20周年記念式典が11月20日に池間小学校で挙行された。功労者表彰式において、仲間屋真など4名に賞状と銀杯が授与された。⁶⁾ (森田(1961):118頁)表彰式では、池間カツオ漁業の創始者である鮫島幸兵衛の名前もあった。池間島において至高の聖域とされるナナムイ(七柱)の神座には、百を数える砂香炉が並んでおり威圧感さえある。⁷⁾ (写真1参照)そのなかには、サメシマカオル(カツオ創業者の鮫島幸兵衛の香炉)もあった。川上メガ[1910(明治43)年生まれ、筆者の川上の実母]によると、カツオが不漁になれば、ニガインマ(巫女)が出向いて、その香炉に大漁祈願の線香を立てたという。



写真1 池間島のカウル(香炉)群
(資料:譜久村健)

なお、鮫島幸兵衛の表彰に関して付記しておきたいことがある。それは日本カツオ学会(当時の会長は筆者の若林)と宮古島市の共催による「2012カツオフォーラム in 宮古島」で、鮫島幸兵衛の玄孫である鮫島実仁氏が特別招待された。⁸⁾ それで、下地敏彦市長から感謝状と記念品が鮫島実仁氏に授与された。感謝状は、「鮫島幸兵衛殿。遺族直系 鮫島実仁。貴殿は明治39年に宮古島でカツオ漁を始めました。島人は100年の歴史から有形無形の恩恵を受け愛着と思い出も秘めています。この功績は漁業革命であり茲に

カツオフォーラム in 宮古島にあたり記念品を添えて感謝の意を表します。平成 24 年 10 月 6 日。実行委員会委員長 下地敏彦」という文である。

4. 池間島発展の原動力となったカツオ産業

大正期になると、池間島のカツオ産業は飛躍的に発展して、「カツオ景気」とでもいうべき状況になり、池間島民の生活も大きく変化した。池間島で最初に瓦葺きの住居が建てられたのは、カツオ漁業が始まってからのことである。それ以後、現金収入の増加に伴って、瓦屋根だけではなく、煉瓦塀や貯水タンクなどを設置した住宅が相いで新築された。

第 1 次世界大戦後の好況時には、池間島の地場産業や地域文化がさらに繁栄し、島民生活の変化に拍車がかかった。平良恵勇 [1906 (明治 39) 年生まれ、隣村の狩俣出身] によると、彼は 1923 (大正 12) 年から 1929 (昭和 4) 年まで池間島で伊良波、小禄の両家で奉公を勤めたが、瓦葺きの家屋数は、狩俣で 4 戸だったのに対して、池間島には 90 戸もあったという。⁹⁾ (平良 (1982) : 39 頁)

それから、池間島の女性たちの服装も華美となり、平良の街中にある商店で買物に行ったり、酒や遊興に興じたりする池間島民が多くいた。(森田 (1961) : 106 頁) 当時、池間島民の奢侈な生活は「俄分限 (にわかぶげん、急速に持ち慣れない富を手にした者)」の様相を呈した。たとえば、池間島の漁業者が平良の西里のサカナヤ (料亭) へ行った時にビールで足を洗った、という話が今も語り継がれている。これは当時、池間島がカツオ漁業で繁栄していたことを如実に表す有名な逸話である。¹⁰⁾ (大井 (1984) : 177 頁)

以上のことから、大正期における池間島のカツオ産業の歴史的な意義について産業経済や生活文化の観点から再整理しておきたい。カツオ産業発展により、池間島民の経済面や生活面で急激な変貌がもたらされ、池間島は宮古地域で特異な存在となった。この状況に対して、違和感や驚異な感覚を抱いた他島の人々が少なからず存在したと推定される。人頭税の廃止後、短期間で、池間島は新たな社会経済状況に入った。明治末期から大正期に、池間島はカツオ漁業導入の成功、そして、カツオ産業化という歴史的な経験を経たのである。旧慣時代に宮古地域の他島とほぼ同じ状況にあった池間島は、一挙に近代化を遂げ、当時、他島の追従を許さないほどの黄金期を築き上げたと言われられる。¹¹⁾ (笠原 (2008) : 74 頁)

昭和期から現在まで、池間島のカツオ漁業は幾度か浮沈を繰り返しながら、息長く存続してきた。(写真 2 参照)



写真 2 昭和 30 年代の池間漁港とカツオ漁船
(資料：山里勝助)

漁業不振を打開するために1929（昭和4）年から始まった南方出漁は、第2次世界大戦の勃発でいったん中止を余儀なくされた。

戦後、社会状況が安定してくると、操業が再開され、1960年代までの地域産業の中心はカツオ漁業であった。1961（昭和36）年の場合、総世帯数435世帯のうち、漁業従事者313世帯、鰹節工場者19世帯、ボルネオ出漁者が8世帯であった。当時の池間島には、アイスクーキ（氷菓子）屋3軒、理髪店4軒、そば屋1軒、豆腐屋3軒といった商店のほか、自家発電による映画館やダンスホールがあって、大変な賑わいがあった。（写真3参照）（野口（1972）：40、140頁）

その後、厳しい人口流出に歯止めをかけられず、カツオ漁業も衰退の一途をたどり、100年目の2006（平成18）年に池間島のカツオ漁業はすべて廃業となった。（伊良波（2011）：166頁）



写真3 昭和30年代の池間文化センター（映画館）
（資料：池間島・前里元長寿会）

5. 池間島のカツオ漁船にみられる漁民信仰

筆者の川上は1995（平成7）年7月16日にカツオ漁船吉進丸に乗船し、カツオ一本釣りの機会を得た。最初のカツオ群れで釣獲したカツオに対しては、一定の儀礼が行われる。三枚おろしにされたカツオの部位7点（ウドゥルツガマ（心臓）1個、カツオの背びれの両端を約5cm切ったもの2切れ、雄節となる切り身のカツオ中央部分2切れ、雌節となる切り身のカツオ両端部分2切れ）が船霊様に供えられた後、漁船員は合掌した。その後、残ったカツオの身は刺身となり漁船員の間で食された。帰港の際には、トゥヌガナス（漂着神）やナムイ（最高神）に向け、2匹のカツオの腹と腹をあわせて敷物の上に並べて、漁船員は合掌した。（川上（2007）：94頁）また、漁船員は帰港途中に大漁旗を掲げて、おおまかな漁獲量を池間島民に知らせた。カツオの漁獲量は100匹単位で算定され、たとえば、カツオ約100匹で旗1本、カツオ約200匹で旗2本、カツオ約300匹で旗3本となり、カツオ約500匹に達すると、長旗が加えられた。さらに、1000匹になると、カツオ漁船の船首と船尾に大漁旗を掲げて入港した。なお、沖縄本島の本部町では、トン数で計算し、3トンで三色の大漁旗、5トンで五色の旗、8トンで八色の旗がなびかせられたという。（久貝（1998）：34頁）

6. 昭和30年代のカツオ産業を基軸にした豊かな島生活

昭和30年代の池間島の生活は、これまでに述べてきたように、カツオ産業を基軸にして営まれた。ここでは、約1年間に及ぶ池間島の生業（カツオ産業）と暮らしぶり（生活風景）を鳥瞰する。そこには、池間島の人々の様々なウムクトゥ（知恵）が内包されている。その点に注目しながら月ごと（旧暦で表記）にみていく。¹²⁾

（1）生業

カツオ漁業は年明けのミヤークサウガツ（旧正月）から始まった。ダイバンジャウ（鰹釣り竹）を素材にして、凧づくりをする少年もいた。この時期には、サウダマウツ（カツオ釣り竹の分配）で得た竿が今年の命運を賭けるといふ、インシャ（海人）の意気込みが伝わってきた。船長宅では、正月用のワータムグッティ（豚肉3斤の配分）や組合のウグナーイ（集い懇話）、そして、ハジメニガイ（出漁願い）のために、漁船員30～40名が出入りして繁忙であった。また、カツオ漁船はセイケツ（ドック：塗装、衣替え）にして、出漁の準備を整えた。

2月になると、イディハズマーイニガイ（仮の出漁願い）として、カツオ漁船は吉日を選んで大漁旗をなびかせながら、沿岸にある御嶽の前で一時停船して祈願した。この儀礼は約30分足らずで終了するが、池間島あげてのものであり、陸上では池間島民が集まり活気に満ちていた。

そして、3月はカツオ漁船の出漁時期となる。サニツ（旧暦3月3日）には、学校が臨時休校となり、池間島じゅうのサバニヤカツオ漁船は客を乗せてヤビジ（八重干瀬）へ行き、タコヤサザエ、タカセガイ（高瀬貝）などが漁獲された。サニツでは、浜辺で池間島の老若男女が手でミナंगाハナ（波頭をすくう）し、手足を清めて無病息災を祈念する儀礼である。

（伊良波（1980）：104頁）夕方には、隣近者が庭に集まり島の魚介類で祝宴をした。この時には、カツオ漁船のニガインマ（船の巫女）が集まって、池間島全体でヒダガンニガイ（航海安全の祈願）は行われた。浜辺に漁家の婦女子が集まり祈願して線香の煙が立ち上る光景は荘厳であった。

4月には、シエートゥガンニガイ（生徒の学業成就・安全の祈願）が行われる。¹³⁾ 池間漁港では、大漁旗が舞い、鰹節工場の煙と特有の臭いで充満していた。船長宅では、ニガインマによる神願いのツズウユシ（カツオ寄せ）、シンドウ（船長）、ジャグナギビヤニガイ（餌撒き祈願）など14種類が行われた。（野口（1972）：260頁）

それから、5月になれば、4日に池間島の三大大行事の一つであるハーリー（海神祭）が4日に行われた。当日は、オハルズ（最高神）へ御願パーリーで始まった。すべてのカツオ漁船は休漁し、夜明け前から大漁旗をなびかせて航海安全と大漁満足を祈願する。当日の早朝、カツオ漁船は出港し、オハルズとトゥヌガナスの2つの御嶽を船上から拝礼して、帰港後、漁

船員に振る舞いをして祝った。池間漁港内では、カツオ漁船員によるヒャーリクズ（ハーリー（割り舟）漕ぎの競争）、児童生徒による水泳が行われたほか、ジャグナギ（餌撒き）と称して、カツオ漁船からスイカやミカンなどを投げて、盛り上がった。（写真4参照）ヒャーリクズが1895（明治28）年に始まり、2015（平成27）年には120年目を迎えた。なお、沖縄県内最初の女性たちによるヒャーリクズは池間島である。1977（昭和52）年に、多くの漁業者が南方出漁したために漕ぎ手不足となり、その存続が危ぶまれた。そこで、池間島の女性たちが立ち上がって伝統を守った。これが沖縄県下で有名となり、今でも熱い戦いは繰り広げられている。1992（平成4）年の池間大橋開通後も、女性の漕ぎ手たちの子供や孫らが数多く訪れ、大きな声援を送り盛り上げている。（仲間井（2000）：222頁）

6月と7月になると、カツオ漁の最盛期となる。カツオ漁船はムギャ（キンメダイ）やアカヅウ（タカサゴの稚魚）といった活餌を捕獲するために、深夜に出港した。（写真5参照）タナバタ（7月7日）には、祖先への水やりと墓地の清掃が行われた。池間島では、ストウガツ（旧7月15日のお盆）の風習はなかったが、戦後、宮古本島にならって行われている。¹⁴⁾ なお、今も春と秋のピンガン（彼岸）の儀礼はない。¹⁵⁾

トウズキビー（願いが叶う）と伝わっているジュウゴヤ（8月の十五夜）は、フキャギ（オハギ）を供物として本家らをスウカウ（焼香）した。ちょうちん作りはじめ、フキャギファイ床ガマが設けられた。¹⁶⁾

池間島最大の行事はミヤークツツである。旧暦8～9月の甲午から3日間にわたって行われる。「スマーナラヒィー ヒカッジャユミ ンミヤイー フウスガ」（当日を一日千秋で待つ心境）として、その主役となる55歳以上のウヤらが活気づいた。この時期には、寒さが増しつつあり、カツオを終漁とする漁船も出てくる。この頃の宮古島では、秋の風物詩であるサシバの飛来がある。伊良波進 [1931（昭和6）年生まれ]によると、カツオ漁業はサシバの時期を境に一旦、休漁し、後片付けをしないカツオ漁船もある。というのも、旧暦10月の「ジュウガツ ナツガマ」（小春日和）を待つためである。それはナツギーヤナツ



写真4 昭和30年代のカツオ漁船（ハーリー時）
（資料：池間島・前里元長寿会）



写真5 カツオ漁船での活餌採捕（昭和40年代）
（資料：川上哲也）

ムドゥイ、10月ドゥリガマと呼ばれ、昭和30年代に稼働していたカツオ船（伸光丸、瑞光丸、照幸丸、重宝丸、泰光丸など）は、水揚げを競い合っており、その決着をつけた。

（2）暮らしぶり

まず、10月はカンヌ ニャーン ツツ（神無月）である。したがって、信仰心の熱い池間島では、個人でも、あるいは、集落単位でも、神願いは控えている。

次に、11月は南国でも寒さが増して、フーツツ（舌を噛むような寒い月）である。以前は、木造のカツオ漁船が砂地の港でバンギ（マツの丸太）の台車に乗って上架されている光景も見られた。

それから、12月のハーツツ（歯がしみるように痛い月）は、石の巻き落としによる一本釣り漁業の最盛期であった。点在するブー（小さな砂浜入り江）はサバニで賑わっていた。時化の時には、オジイ（老人）が舟揚場の高台に集まって、海原の水平線を眺めながら、カツオ漁などの話で盛り上がった。他方、毎日午後4時頃、池間島の中心地にある公民館にオジイ15名ほどが集まって軒下で火を囲んで語り合ったこともあった。¹⁷⁾ このように、オジイの間では、ゆったりした時間がながれ、漁模様をはじめ様々な情報の交換が行われた。

続いて、1月はナガツツ（長い夜の月）で、アカイカ釣りの季節である。月夜になると、天候を見計らって手こぎのサバニで出船した。そのことは池間島の中学生が俳句「漁に出た父を迎えに十三夜」と詠んだ。特に、この時期に好天気となれば、夕方の船着き場がにぎわい、帆掛けのサバニがヤビジ（八重干瀬）へ向かう光景は勇壮であった。

さらに、2月のカナスツツ（愛らしく嬉しい月）は春を待ちわびる時期である。インシャは、2月を最も恐れるニグツマーイ（2月風廻り）であり、海難事故に留意した。俚諺「ヒヤイマガン ヌ アナヌ インカイ インキヤンキヤア ニグツカジヤマーイヤ ヤスマン」（浜辺のカニが海の方向に巣穴を作らなければ安心できない）のとおり、航海には細心の注意が払われた。（前泊（1958）：45頁）

3月から9月までの間には、月の呼称がないものの、神願いでは干支に配慮した。具体的には、ニガインマ（神司）のカドゥ（選日）は10月をネとして、1月をトラとして数える方法である。（野口（1972）：204頁）

7. おわりに

本稿では、池間島のカツオ産業文化に関して、「魚職（職＝カツオの職業、すなわち、ここではカツオ産業であるカツオ漁業と鰹節製造業）」の視点から、先行研究と口述記録をもとに点描した。カツオに関わる産業経済と生活文化の暫定的な総括は、次の3点に整理できる。

第1に、池間島におけるカツオ産業の発展過程において、鮫島幸兵衛は特筆すべき人物であり、まさに、池間島におけるカツオ一本釣り漁業の始祖ともいえ、池間島の地域振興に関する原動力となったことは明白である。そして、現在も、この功績を称える取り組みが実施されたことは、地域産業としてのカツオ産業のあり方を考える上で極めて重要である。

第2に、鮫島幸兵衛の創業を起点に発展したカツオ産業は、池間島の産業経済、さらには、生活文化に大きなインパクトを与えたことが端的に明示できた。今は、往時を偲ぶ状況にあるものの、漁民信仰など池間島の精神世界は残存していることも把握できた。

第3に、カツオ産業に関連する生活文化では、年中行事や宗教儀礼を通して、相互扶助という共同性が醸成されるとともに、それに基づく生活の知恵が随所に活かされていた。そして、地域間の交流と連携をもとにした営みから、池間島の豊かな叙情性が垣間見られた。

今回は、諸事情で断片的な検討にとどまったが、今後も、筆者らは池間島のカツオ産業文化を探求していきたい。文献の渉猟と整理、フィールドワークの成果をもとに、カツオ産業文化を学際的に分析していく所存であり、本紀要などでさらに続編を準備予定である。

注

- 1) 本稿作成に関する役割分担としては、まず、川上が各種の資料をもとにして取りまとめた上で、若林が本稿の目的や主旨に従って全面的に書き改めた。
- 2) 7つの「ぎょしょく」の内容と効果に関する詳細については、若林良和（2018）を参照されたい。
- 3) 「ぎょしょく教育」の実践は、新聞や雑誌、テレビ、ラジオなど多くのメディアで再三、報道され、また、2度にわたって『水産白書』にも紹介された。さらに、「地域に根ざした食育コンクール 2006」の優秀賞受賞、大日本水産会の魚食普及表彰など社会的な評価が高まった。
- 4) 伊良部島佐良浜のカツオ漁業は、池間島から3年遅れて1909（明治42）年に御幸丸で始まった。技術習得のために、石原金三ほか数名が参加した。当時の漁場は平良と佐良浜の中間にあり、伊良部島からもカツオ釣っている情景が眺望できた。（伊良部村史編さん委員会（1978）：195頁）
- 5) 鯉節削り女工に関して、次のような唄もある。「木の葉な池間じゃけれど／好きな女がいるからね／好きな高知県もいやになり／いやな池間が好きになり／ここに 100 万円の

お金があれば／高知県の鯉節を買い集め／好きな女に削らせて／おそばで見物していたい。」（川上（1989）：13頁）

- 6) 大正初期に流行した唄としては、次のようなものがある。「機関士は洋服つけて靴はいて／歩く姿はよけれども／靴は油で真っ黒けのけ／洋服のめずらしいあこがれの的であった。」（森田（1961）：86頁）
- 7) 香炉は日露戦争時代から兵役を無事に終えた兵士たちが神様に感謝して奉納したもので、120個もあった。それらのうち、20個の香炉が2002年に何者かによって無惨にも壊された。（宮古毎日新聞、2002.1.18）
- 8) 日本カツオ学会は、筆者の若林らが2010年に高知県で設立した学会であり、カツオによる地域連携や産学官連携を基盤にして、カツオの価値を再生・創造を意図したものである。カツオフォーラムの開催地として、第1回が高知県黒潮町、第2回が鹿児島県枕崎市であり、第3回が宮古島市となった。
- 9) 長崎トヨ〔1913（大正2）年生まれ〕によると、池間島から分村した西原では、戦前、茅葺きの家造りのために、朝食前に十字路で「今日は〇〇屋の家造りだから隣組そろってススキを刈り取って束で届けてください」知らせたという。古い茅葺きの住居が数年のうちに姿を消し、集落の景観は一新した。
- 10) 平良滋之〔1927（昭和2）年生まれ〕によると、雨が降った際に、足の泥を払うためだったとも言われている。
- 11) 久松と池間は強い団結力があると指摘しているが、その背景にはカツオ漁業によるものと推察できる。（砂川（2002）：156頁）
- 12) 1956年に琉球政府は新生活運動推進協議会を設置して生活改善を奨励した。特に、新生活に新正月と旧正月の合理化を図るべく、「新正月一本化運動」が強く進められた。（沖縄タイムス（1998）：21頁）
- 13) 宮古島市内の小学校各校には、学校東方の一角に拝所がある。西辺中学校ではツカサンマ（司母）ら50～60名のオバァ達が出席して祈願する。卵100個ほど供えるが、これには「卵を親雛に見立てて巢出る」という意味がある。
- 14) 宮古島市平良では、旧盆のタナバタ（七夕）に先祖の神に水を注ぐ習わしがある。井戸に依存していた時期には、家族が午前3時～4時ごろ水を汲み、先祖の神に祈りながら、井戸端にすてた。（平良市教育委員会（1987）：4頁）
- 15) ピンガン（彼岸）は春と秋に行われる。ヤームトゥ（家元、本家）に集まり重箱を神棚に供えウチカビ（紙銭）を焼いて焼香をたき皆で会食する。（平良市教育委員会（1987）：296頁）

- 16) 電気のなかった昭和 30 年代までは、池間漁港や広場には、色とりどりの提灯が並べられ、幻想的な光景であった。また、昭和 20 年代まではイスディンマ(石造舟)も楽しんだ。
- 17) 昭和 30 年代、時化のときには、ハカヤー(隣近所)ごとに集まって、風水害の情報収集を行うとともに、花札や囲碁に興じた人たちもいたという。

文献(本文中で参照・利用した文献)

- 伊良波盛男(1980)『詩集 カナシ伝』矢立出版
- 伊良波盛男(2011)『わが池間島』池間郷土学研究所
- 伊良波ひろし(2013)『池間島からの視点～マヤクヅツ・カツオ漁業を中心に～』だしきや企画
- 伊良部村史編さん委員会(1978)『伊良部村史』伊良部村上里武・本村満(2005)『島に生きて ～奇跡をみた男たち～』私家版
- 大井浩太郎(1984)『池間嶋史誌』南西印刷
- 大川恵良(1974)『伊良部郷土誌』山一出版印刷社
- 沖縄タイムス社(1998)『沖縄戦後生活史』沖縄タイムス社
- 加藤久子(1987)「池間島の漁業と離島苦の女性労働」「地域と文化」第45号
- 笠原政治(2008)『池間民族考』風響社
- 川上哲也(1989)『仲原壮一郎と池間島』私家版
- 川上哲也(2007)『カツオ万歳』沖縄自分史センター
- 久貝克博(1998)『宮古回帰』印刷センターよなみね
- 砂川玄德(1999)『宮古島人間風土記～終戦から復帰まで～』サン印刷
- 砂川玄德(2002)『続・宮古島人間風土記』比嘉興文堂
- 平良新弘(2002)『海人の島』印刷センターよなみね
- 平良恵勇(1982)『私の回顧録』オリジナル企画
- 仲宗根将二(1988)『宮古風土記』ひるぎ社
- 仲間井佐六(2000)『伊良部町漁業史～パヤオ発祥の地～』佐良浜印刷
- 仲間明典(2012)『佐良浜漁師達の南方鰹漁の軌跡』地域おこし研究社
- 2012 カツオフォーラム in 宮古島実行委員会(2013)『2012 カツオフォーラム in 宮古島報告書』2012 カツオフォーラム in 宮古島委員会
- 平良市教育委員会(1987)『平良市史 第7巻 民俗』サン印刷

- 森田真弘（1961）『仲間屋真小伝～池間漁業略史～』内外水産研究所
野口武徳（1972）『沖縄池間島民俗誌』未来社
前泊徳正（1975）『前泊徳正ノート』私家版
若林良和（1991）『カツオ一本釣り』中央公論社（中公新書 1021）
若林良和（2008）『ぎょしょく教育 愛媛県愛南町発水産版食育の実践と提言』筑波書房
若林良和・川上哲也（2019）「宮古・池間島のカツオ産業文化誌（1）－近現代における池間島カツオ産業史の整理と検討－」『宮古島市総合博物館紀要 23』

付記

本稿は、2018～2022（平成 30～令和 4）年度科学研究費補助金「カツオを題材とした水産版食育の実践的研究 - 「ぎょしょく」の体系化とツール開発-」（基盤研究（C） 課題番号：18K01996 研究代表者：若林良和）を活用した成果である。

